

## 2018 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	清水 大輔
研究テーマ	地域在住の認知機能障害者への社会生活への介入効果

### <助成研究の要旨>

#### 《背景》

脳血管障害や外傷性脳損傷後による高次脳機能障害者の生活における障害は、当事者の疾患/受傷起因によってさまざまである。この障害は、本人だけでなく、家族や周囲の支援スタッフも困らせる。公的な医療機関でリハビリテーションは終了しても、リハビリテーションは実生活場面で継続される必要がある。そのためには、地域に事業所や福祉施設での継続的なフォローも必要である。

#### 《本研究の目的》

記憶障害や遂行機能障害などの認知機能に問題を有する高次脳機能障害者が社会で暮らしていく時の困りごとに対する、介入効果を明らかにすることである。

地域活動支援センターを利用している高次脳機能障害者が社会生活の中で、解決したい活動に焦点を当て、人的支援またはICT ツールを用いて行動を定着させるアプローチを行う。この行動の継続的変化を明示化することで、他の社会生活行為の解決をはかる際の一助とする。

#### 《介入の計画》

介入はシングルケースデザインの ABA 法を用いた。最初の A 期はベースライン期として、これまでと同様の方法で通所している期間とした。B 期は介入期として、作業療法士が実際の経路を同行しながら通所練習を実施した。2 回目の A 期はフォローアップ期として、介入終了後に効果の持続性を評価する目的で設定した。

#### 《対象》

対象は地域在住の高次脳機能障害者とその家族とし、対象者およびご家族と面接を行う中で、地域活動支援センターまで一人で通所できるようになりたい、または、できるようになってもらいたいという内容が聴取できた 2 例に対して公共交通機関を利用した単独通所練習を実施した。

#### 《結果》

単独で公共交通機関を利用する練習を実施したことによって地域活動支援センターへの通所が単身で可能となった。介入を終了した後も、継続して単身で公共交通機関を利用しながら通所できていた。

#### 《考察》

受傷前または発症前から公共交通機関を使用し外出を行っていた経験が非常に豊富であった。その点も、今回の良好な結果に影響していることが考えられる。

また、支援者は 2 例に対して公共交通機関の利用練習中に、できたことはすぐにポジティブなフィードバックを行った。このポジティブなフィードバックが達成感を高めることになり、行動の継続に繋がっている一つの要因だと考えられた。